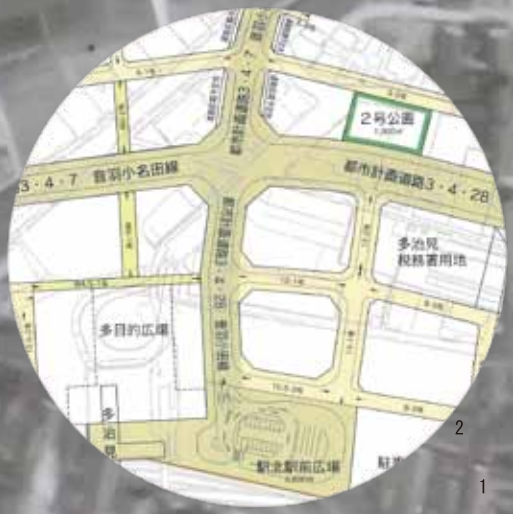
多治見市制 77 周年
多治見市文化財保護センター企画展

発見！



地中に眠る多治見の歴史

―住吉・駅北・笠原の発掘調査報告展―

はじめに

私達が住む街は、日々変化を続けています。交通の利便性の向上を目指し、災害から街と人を守ることなどを目的に開発が進むことで、市民にとって暮らしやすい街づくりが進められています。一方で開発にあたって、地中に眠っていた大昔の人々のくらしの跡や道具などの、埋蔵文化財が失われつつあります。それらがやむを得ず失われる場合は、事前に発掘調査を行い、得られた成果を実測図や写真で残す、記録保存という方法がとられます。発掘調査では、住居を建てたり、水路を築き田畑を耕作したり、窯を築いて陶磁器を焼いたりといった、数百年から数千年以上前の人々のくらしや文化を知ることができます。

今回紹介する遺跡は、古窯跡・集落跡など時代も種類もさまざまです。古窯跡は岐阜県では東濃を中心に数多く発掘されていますが、近年の発掘調査でも窯業史研究にとって重要な成果を挙げており、当地域の歴史を語る上で欠かせないものといえるでしょう。また、集落跡調査からは、昔の人々の生活や当時の土地利用の様子を知ることができ、貴重な資料となります。

この企画展では、近年の多治見市内における土地区画整理事業に伴う発掘調査の成果をご覧いただきたいと思います。公開するのは膨大な発掘出土品のごく一部ですが、今回の展示によって身近な郷土の歴史の一端に触れていただき、埋蔵文化財に対する理解を深めていただければ幸いです。

1 多治見駅周辺〔昭和 23 年航空写真（多治見市図書館 郷土資料室提供）〕
2 多治見駅北土地区画整理事業計画図（多治見市 市街地整備課提供）
3 住吉 16 号窯跡出土　緑釉陶器 碗
4 住吉 16 号窯
5 権現遺跡（第 6 次調査）

住吉古窯跡群　～美濃で初「緑釉陶器窯」発見～

●多治見住吉土地区画整理事業に伴う発掘調査
●所在地　　金岡町 5 丁目、虎渓山町 2･3 丁目、
　　住吉町 7 丁目、長瀬町の一部
●調査期間　平成 25 年 4 月～ 26 年 1 月、
　　平成 26 年 4 月～ 5 月

※住吉土地区画整理事業組合提供の計画図に加筆したもの。

この遺跡は、多治見市街地の北部に立地する古窯跡群です。長瀬山と呼ばれる標高 150m から 190m の丘陵地の南端部分にあたり、周囲には虎渓山古窯跡群などがみられます。古代においてこの地域は美濃国可児郡池田郷に属し、池田郷中に「池田御厨」と呼ばれる伊勢神宮の領地が存在しました。住吉地区を含む長瀬山一帯で発見された灰釉陶器の中に「大一」「大二」（伊勢神宮貢納品の印）と刻印されたものがあり、この一帯の窯で焼かれた灰釉陶器が伊勢神宮に貢納されていた可能性があります。

住吉古窯跡群は、陶都中学校の北側の比較的低位置に所在する古窯跡群と、尾根に近いところに所在する古窯跡群に分かれていました。調査の結果、10 世紀中頃から 11 世紀中葉まで窯を移動させながら灰釉陶器が焼かれ、少し間をおいて 12 世紀後半から 13 世紀前半にかけて山茶碗が焼かれたことが判明しました。平安時代の灰釉陶器窯は８基、同時代の緑釉陶器窯が１基、鎌倉時代の山茶碗窯が４基検出され、各窯に付随する作業場の跡などの遺構が発見されました。

▲（上）15 号窯　（下）16 号窯

住吉古窯跡群 各窯の概要

窯名	主な時代	主な遺構	窯の形態	焼成遺物	美濃焼物編年	その他の遺物・特記事項
1号窯	平安時代	窯体・土壙・排水溝	窖窯	灰釉陶器	大原2号窯式期（10世紀前半）	窯道具。窯内撹乱
2号窯	鎌倉時代	窯体・土壙・排水溝	窖窯	山茶碗	丸石3号窯式期（12世紀末～13世紀初）	窯道具、隆帯付壷の出土
3号窯	平安時代	窯体・土壙	窖窯	灰釉陶器	明和27号窯式期（11世紀中葉）	多口瓶の注口部出土
4号窯	平安時代	窯体	窖窯	灰釉陶器	西坂1号窯式期（11世紀後葉）	窯体の一部と物原滅失
5号窯	鎌倉時代	窯体・土壙・作業場	窖窯	山茶碗	丸石3号窯式期（12世紀末～13世紀初）	窯道具・石製道具
6号窯	鎌倉時代	窯体	窖窯	山茶碗	丸石3号窯式期（12世紀末～13世紀初）	窯道具・石製道具
7号窯		窯体と遺物が存在せず				
8号窯		窯体と遺物が存在せず				
9号窯	平安時代	窯体が存在せず		灰釉陶器		石製道具
10号窯	鎌倉時代	土壙　（窯体が存在せず）		山茶碗		
11号窯	平安時代	窯体・土壙・排水溝	窖窯	灰釉陶器	明和27号窯式期（11世紀中葉）	窯道具・石製道具
12号窯	平安時代	窯体・土壙・作業場	窖窯	灰釉陶器	明和27号窯式期（11世紀中葉）	
13号窯	平安時代	窯体	窖窯	灰釉陶器	丸石2号窯式期（11世紀前葉）	窯道具。物原半滅失
14号窯	鎌倉時代	窯体・土壙	窖窯	山茶碗	丸石3号窯式期（12世紀末～13世紀初）	窯道具
15号窯	平安時代	窯体・土壙	窖窯	灰釉陶器	虎渓山1号窯式期（10世紀後半）	窯道具・石製道具。窯内撹乱
16号窯	平安時代	窯体	平窯	緑釉陶器	虎渓山1号窯式期（10世紀後半）	窯道具。緑釉陶器専用窯
17号窯	平安時代	窯体	窖窯	灰釉陶器	明和27号窯式期（11世紀中葉）	窯道具・石製道具。窯体半滅失、物原撹乱

※『住吉古窯跡群発掘調査報告書』（多治見市埋蔵文化財発掘調査報告書第94号、2016）より、再構成して転載。

〈緑釉陶器と 16 号窯〉

本調査で発見された 16 号窯は、美濃で唯一の検出例となる緑釉陶器専用の小型平窯で、この発見により美濃の緑釉陶器生産の実態の一端を明らかにすることができました。

古代における緑釉陶器とは、鉛釉に発色材として銅を加え、低火度の酸化炎焼成により釉を緑色に発色させた施釉陶器です。日本では７世紀後半代に朝鮮半島から技術が伝わり、畿内において緑釉陶器の生産が開始されました。平安時代における緑釉陶器は、祭祀器を主な目的としつつも、上流階級の愛用品として作られた高級陶器でした。平安京のほか、東北から九州にわたる各地の寺院跡や古代の役所跡周辺などから主に出土していることが、特殊品である緑釉陶器の性格をよく表現しています。

平安時代初期に京都で生産が行われた緑釉陶器は、後に愛知・山口・滋賀などに生産拠点が移りました。愛知に生産が広まった影響下で、この東濃の地でも緑釉陶器が焼成されていたことは、過去の調査で知られていましたが、その実態は不明でした。今回、美濃では初めてとなる緑釉陶器専用窯の発見は、この地域の緑釉陶器生産を知る上で画期的な事例と言えます。なお、16 号窯は重要な資料であるため、剥ぎ取り立体標本を作成して、現在は多治見市美濃焼ミュージアムで展示しています。

▲出土した緑釉を施した陶器
（多治見市教育委員会所蔵）

七ツ塚遺跡　～多治見市内最大級の集落遺跡～

●多治見駅北土地区画整理事業に伴う発掘調査
●所在地　　音羽町１・２丁目、白山町１・２丁目
●調査期間　第１ 次調査開始：平成 19 年 2 月
　　第 14 次調査終了：平成 27 年 7 月

※多治見市 市街地整備課提供の計画図に加筆したもの。

七ツ塚遺跡は、縄文・弥生時代から古代・中世を主体とする集落遺跡で、平成 18 年度の多治見市が進める土地区画整理事業に伴う試掘調査により、その存在が初めて明らかになりました。遺跡の詳細な範囲は不明ですが、これまでに行った調査から、東西約 500m、南北約 200mの範囲で遺物包含層が確認されており、その面積は約 10 ヘクタールと市内では最大級の遺跡と考えられます。また、昭和 30 年代頃まで、この一帯の水田には直径３～４ｍの「塚」が 7 箇所存在したと言われ、この塚の存在から「七ツ塚遺跡」と命名されました。

遺跡の調査は、本発掘が第１～ 14 次まで行われ、縄文時代～近現代までの遺構・遺物が発見されました。発掘された遺構は、縄文時代の溝状遺構や土壙、古墳時代の溝状遺構、弥生時代～奈良時代の竪穴式住居跡、中世の灌漑用水路、江戸時代の暗渠（地下水路）施設などがあります。また、七ツ塚遺跡において弥生時代後期（２～３世紀）より稲作が始まったことが、発掘現場から採取された土壌の科学的な分析によって判明し、この地域に集落が形成され、稲作を伴う生活が営まれていたことが分かります。

▲第 8 次発掘調査区
弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴式住居（４軒）等の遺構と、石器や縄文･弥生土器、陶器類が出土した。

この遺跡は多治見駅の北側に立地しており、駅と関係のある面白い遺物が大量に出土しています。それは近現代の汽車土瓶です。鉄道は、明治 33 年（1900）に名古屋ー多治見間、その２年後に多治見ー中津川間が開通し、人やモノの往来が盛んになりました。汽車の旅でお茶を入れた汽車土瓶を携行し、飲み終わったものを駅で廃棄したと思われます。

▲灌漑用水路跡（第 7 次調査区）

〈中世の灌漑用水路〉

第７次発掘調査において 14 世紀後半から 15 世紀後半（南北朝～室町時代）にかけて機能した大規模な灌漑用水路の跡が検出されました。検出できた用水路の跡は全長約 50mで、幅 1.5m の溝の両岸には数千本の木杭と横木、礫で補強された幅 2 ～ 3mの大掛かりな土手を伴っていました。溝の中には細かい砂粒が堆積し、実際に水流があったと考えられます。灌漑用水路とは、田畑に水を引くための水路のことで、この水路の近くに水田があったことを示す遺構でもあります。

▲水路跡の木杭

こうした大掛かりな中世の灌漑用水路の発見は県内でも２例目で、全国的にも珍しいものです。またこの用水路跡は、明治 35 年に完成した「虎渓用水」と水路の方向が一致していたことも注目されます。このことは、近代に至るまでこの中世の用水路の痕跡が残り、それを辿るように「虎渓用水」のルートが設定された可能性を示しているのではないでしょうか。

砂田・総作遺跡、 権現遺跡 ～古代の笠原新発見～

●神戸・栄土地区画整理事業に伴う発掘調査

●所在地

笠原町字砂田、字総作、 字中芝、字古御所、字権現

●調査期間

砂田総作遺跡

第１次調査開始：平成 21 年１月

第７次調査終了：平成 27 年 12 月

権現遺跡

第１次調査開始：平成 21 年５月

第７次調査終了：平成 24 年６月

※神戸・栄土地区画整理事業組合提供の計画図に加筆したもの。

▲古代の祭祀用土器か
（砂田・総作遺跡第３次調査区）

砂田・総作遺跡と権現遺跡は、笠原町に存在する集落遺跡です。両遺跡は、町内を南東から北西に向かって流れる笠原川左岸の河岸段丘面に広がっており、字名からその東半を砂田・総作遺跡、西半を権現遺跡と命名しています。ただし両遺跡は本来一体の遺跡と考えられます。

これまでの調査で、両遺跡は縄文時代から人の生活が営まれており、古墳時代終末期（７世紀）には集落が形成されていることが分かりました。また鎌倉～室町時代になると、笠原川近くの低い段丘面が住居や農地に活用されるようになります。古墳時代の遺構は南側の段丘より一段高い所から、また鎌倉～室町・江戸時代以後の遺構は主に川に近い段丘で検出されており、古い時代の生活の痕跡は高い場所、新しい時代の生活の痕跡は低い場所にあったといえます。中世の出土遺物をみると、東濃型の山茶碗が多い中、土岐川以北ではあまり見られない尾張型の山茶碗が一定量出土しています。これは笠原町が愛知県と接しており、市内では尾張型山茶碗の分布域に近いという、地理的要因によるものと思われます。

なお、砂田・総作第３次調査では、川岸の近くから古墳時代の土師器･須恵器（多くは原形を留める）がまとまって出土しており、何らかの祭祀の跡ではないかと推定されています。

〈古墳時代の集落〉

幅広い年代の遺物･遺構がある中で、特徴的なのは古墳時代と中世のものです。特に古墳時代終末期の竪穴式住居跡が７軒検出されており、集落の存在が確認されています。近辺に中世の集落遺跡である厩ヶ洞遺跡がありますが、それより古く、笠原町内で最も古い集落遺跡です。住居跡からは、竈の跡と思われる被熱して変色した床面や炭化した木材などが発見され、生活の痕跡がうかがえます。

また近くに築かれた円墳の狐塚古墳（７世紀前半、県史跡）は近い時期に築かれたもので、この古墳と集落跡との関連性も注目されます。

▲古墳時代の竪穴式住居跡から出土した須恵器
（権現遺跡第３次調査区）

多治見市文化財保護センター企画展パンフレット

「発見！地中に眠る多治見の歴史
―住吉･駅北･笠原の発掘調査報告展―」

●展示期間

文化財保護センター：平成 29 年９月 19 日（火）～平成 30 年２月２日（金）

美濃焼ミュージアム移動展：平成 30 年３月９日（金）～４月８日（日）

●発行　多治見市教育委員会・文化財保護センター

〒507-0071 岐阜県多治見市旭ヶ丘 10-6-26

TEL(0572)25-8633 FAX(0572)24-5033

URL http://www.city.tajimi.lg.jp/bunkazai/

●発行部数　600 部（印刷費用 16,500 円）